

朝日新聞経済部

限界 に ぼん

悲鳴をあげる雇用と経済

岩波書店

朝日新聞經濟部

限界 にっぽん

悲鳴をあげる雇用と經濟

岩波書店

朝日新聞経済部

日々の経済報道を追いながら、多くの連載取材も手がける。書籍化されたものとして『失われた〈20年〉』（岩波書店、2009年）、『電気料金はなぜ上がるのか』（岩波新書、2013年）など。

限界につぼん—悲鳴をあげる雇用と経済

2014年3月27日 第1刷発行

著者 あさひしんぶんけいざいぶ
朝日新聞経済部

発行者 岡本 厚

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
電話案内 03-5210-4000
<http://www.iwanami.co.jp/>

印刷・三秀舎 製本・三水舎

© The Asahi Shimbun Company 2014
ISBN 978-4-00-022798-8 Printed in Japan

㊗日本複製権センター委託出版物 本書を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上の例外を除き、禁じられています。本書をコピーされる場合は、事前に日本複製権センター（JRRC）の許諾を受けてください。

JRRC Tel 03-3401-2382 <http://www.jrrc.or.jp/> E-mail jrrc_info@jrrc.or.jp

限界にっぽん

はじめに

「限界につぼん」で、サラリーマン「追い出し」の物語が始まった。

そのささやかな会合の情報を取材班がつかんだのは、「追い出し部屋」の報道を始めて、しばらくしての頃だった。

企業が余剰になった社員を集め、仕事を与えなかったり、単純作業をやらせたりしながら自己退職や転職に追い込む。陰湿なリストラ禍がパナソニックやソニー、日立、リコーなど、「勝ち組」とされた企業にまで広がっていた。

週末の夕方、地下鉄浦安駅ビル内の居酒屋。カップルでにぎわう店内に集まったのは、アマゾンの物流拠点の「営業所」に配属された日本通運の中間管理職らだった。

派遣社員らにまじって、巨大倉庫内を動き回りながらネットで注文のあった商品を探しだす仕事を始めて三カ月。早めの暑気払いをかねての慰労会のようなだった。ポロシャツ、ナップザック姿でどこか居づらそうな中年サラリーマンたち。だが、酒が進むにつれ昔の職場のことなどで話がはずんだ。

お開きが近づくと、一人が立ち上がった。

「これから先、何カ月、いや何年いられるかも分かりませんが、がんばりましょう」。すでにお酒の

かなり入った男性が応じる。

「がんばるぞ。がんばるぞおー」

散会後、帰途についた連呼の男性は、千鳥足で駅のほうに。電車に乗って二駅目で降り、別の路線のホームに移動すると、膝に手をあて頭をたれた。「げーっ」。直後に来た電車を見送り、次に来た電車に乗ったが、すぐに降りてホームの端にうずくまり、また吐いた。その後、後続の電車に乗り直すと、シートに倒れ込むように横たわった。「追い出し部屋」に入って三カ月、酒が進まずにはいられなかった。

「なぜ自分が……」

「カイシャのためにがんばってきた俺を……」

「追い出し部屋」に配属された大半の人が、裏切られた思いを口にした。そんな叫びに企業側はマニュアルに従ってつくられた問答集どおりに冷徹に突き放す。「あなたにやってもらう仕事はないのです」「会社存続のための決定です」。

残った社員にも不安と不信が強まり、職場ではだれもが孤立し、カイシャは乾いた荒漠としたものになった。非正規社員の中には、便利に使われるだけで安い給料しかもらえず、寝る場所もなく二四時間営業の店を夜通しさまよう「マクド難民」化する人たちも出てきた。

いつごろからだろうか。雇用や職場の風景がこんなに変わったのは。

市場経済が地球規模に広がるグローバル化や情報通信（IT）技術の進歩は「富」の規模を拡大させ、新興国や途上国がかつてない成功を収める環境をつくり出した。だが先進国にとっては明るい話ばか

りではない。一〇分の一や二〇分の一の賃金で働く数十億の働き手が世界経済に組み込まれ、一方でIT技術が生産ラインやオフィスの至るところに応用された。世界の供給能力が需要をはるかに上回る中で、先進国の働き手は雇用が減り、失業や賃金の停滞、格差の拡大に直面している。

なかでも日本の漂流感はひとしおだ。新興国企業の追い上げ、グーグルやアマゾンに象徴されるグローバルIT企業の台頭で、かつての成功のビジネスモデルは陳腐化した。株価を上げ金融をふくらませて経済を回す金融資本主義や、産業政策や為替戦略などを総動員して国家が市場競争競争の前面に出る新重商主義のような動きが勢いを増す中で、経営者は余裕と自信を失って人減らしに走り、「お家大事」の企業内労働組合はただ受け入れるだけだった。

かつて石油危機の当時も、グループ企業内で仕事をつくったり人手不足の他産業に応援出向させたりするなど、人が余ってもカイシャに抱える工夫がされた。だが今はむしろ社外に放り出すことに重きが移り、そんな中で「追い出し部屋」は多くの企業に広がった。

「ジャパン・アズ・ナンバーワン」とされたほんの少し前まで、安定雇用のもと経営と働き手が一体になった日本型経営は日本の競争力の根源だといわれた。終身雇用と手厚い福利厚生で企業が従業員を支え、分厚い中流層が社会の安定の基盤だった。みんなが力を合わせて成果を分け合う。カイシャを通じて豊かになり、働くことは社会に参加することだった。こうした伝統的な社会契約や、成長ですべてを得てきた生き方が崩れ去ろうとしている。

雇用の悲鳴は「勝ち組」企業の正社員にまで及びはじめたが、「追い出し部屋」の意味はそれにとどまらない。戦後の成長を支えた制度が大きく軋み、価値が揺らぐ「限界にっぽん」で、サラリーマ

ン社会、中流層が崩れていく物語の始まりなのだろう。

だが雇用の危機を放置したまま経済は成長できるのか。働き手を疲弊させるだけの社会に未来はあるのか。

深刻なのは「その後」に何が生まれるのか、見えないことだ。

失われたへ20年へ

朝日新聞「変転
経済」取材班 編

四六判二六二頁
本体一九〇〇円

電気料金はなぜ上がるのか

朝日新聞経済部

岩波新書
本体七二〇円

生活保障の戦略

—教育・雇用・社会保障をつなぐ—

宮本太郎 編

四六判二三八頁
本体一七〇〇円

ルポ雇用劣化不況

竹信三恵子

岩波新書
本体七四〇円

岩波書店刊

定価は表示価格に消費税が加算されます
2014年3月現在

目次

はじめに

第1章 貧困と生活苦のにつぼん

1

1 夜をさまよう「マクド難民」——非正規の職まで失う 2

2 マクド難民予備軍——稼ぎ悪すぎ、アパートなんて 8

3 生活保護——働いていても生活できない 12

4 削られる生活保護——怠け者のレッテル、悔しい 16

第2章 追い出し部屋——にっぽんの「勝ち組」がたどり着いた先 23

1 配属先は「追い出し部屋」 24

2 追い出し部屋次々(1)——「客つくれ、会社来なくていい」 39

3 追い出し部屋次々(2) 49

4 出向という名の「追い出し部屋」 57

5 日通管理職の「アマゾン」行き——「自分が機械になった気分」 66

6 追い出し部屋に違法判決 71

▼資料1 ノエビア社員が退職を迫られた上司とのやりとり 81

第3章 人切り社会につぼん 85

1 再就職支援ビジネス——「全力で支援、なんてウソだ」 86

2 派遣に代わり増える出向——「異業種でも、仕事あれば」 93

3 人切りが招いた心の病——「うつになった。人間は弱い」 98

4 役に立たないセーフティネット——「基金は都合のよいサイフ」 105

▼資料2 「首切りマニキュアル」に沿って行われたリコー元社員

への退職を求める通告の例 109

第4章 「超国家企業」という荒波——空洞化するにつぼんの雇用 113

1 ユニクロ、世界で賃金統一——「超国家企業」が揺さぶる雇用 114

2 フラット化する賃金——「国内に残すなら賃下げ」 120

3 サムスン村へ——海渡る企業 124

4 国を超え手を結ぶ巨大企業——「一業種一社のような世界」 131

5 遠ざかる製造現場——「タイ、もう割に合わない」 138

6 止まらない人材流出——「技術、ピンポイントでねらう」 142

7 社長も本社も外へ——「海外、まず自分が出よう」 147

8 国内生産、根こそぎの空洞化——「グローバル化は、現地化」 151

9 系列切り——「中小企業、弱肉強食の時代」 155

10 インタビュー・柳井正——「ブラック企業」批判に答える 160

11 インタビュー・志賀俊之——「空洞化、ものづくりの分水嶺」 164

第5章 偽りの成長戦略——雇用なきにつぼんの姿 169

1 介護バブル——群がるファンド 170

2 「介護を成長産業に」の陰で——「なぜ突然値上げするのか」 177

3 票とカネ操る「介護族」——「介護施設を選挙事務所に」 182

- 4 役所のための成長戦略——「医師や介護スタッフが来ない」 186
- 5 「国土強靱化」のウソ——「今回が最後のバブル」 191
- 6 日米の金融緩和、壮大な実験——「超低金利で新たなバブル」 197
- 7 ターゲティング政策の復活——「先端産業取られたくない」 202
- 8 国境越える競争——「チャイナ・マネーで雇用をつくる」 211
- 9 労働規制緩和をめぐる攻防——「会社は解雇なんて簡単」 217
- 10 雇用の悲鳴、一段と 222

おわりに 229

▼資料3 人事担当者用の「首切りマニュアル」の一例(抜粋・要約)

第1章

貧困と生活苦のにつぼん



深夜営業のマクドナルドで眠る男性。店員が起こすことはなかった



終電前、駅の待合室で眠る男性

1 夜をさまよう「マクド難民」——非正規の職まで失う

ネットカフェに泊まる金もない

大阪市の繁華街ミナミ。難波駅近くにあるマクドナルドは、午前〇時になると店内の風景が一変した。サラリーマンや学生たちと入れ替わりに、くたびれた手提げ袋を抱えた男性たちが入ってくる。

「マクド（マクドナルド）難民」。大阪でそう呼ばれる人たちだ。

三、四十代ぐらいだろうか。この夜もぼさぼさの髪に、黒や灰色のジャンパー姿の数人が、テーブルにうつぶせになったり、ソファに足を乗せたりして所在なげに過ごす。

「金がないから、ネットカフェには泊まらない」。パナソニックの工場で請負の仕事をしていた男性（35）は言う。深夜営業の店を渡り歩く生活を始めて一年近くたつ。

朝はパチンコ店に入り、ソファに座って新聞や漫画本を読む。そのまま仮眠をとることもある。以前は、ゲームセンターにも通っていたが、寝ていると起こされるので、足が遠ざかった。ポケットの中には、赤の携帯電話が入っている。「大手三社で、合わせて一〇万円以上の滞納があるから通話はできない。それでも、テレビが見られるから……」。充電は、携帯ショップの無料サービスを利用している。

街を歩き始めるのは夕方からだ。スーパーで格安の総菜を買ってビルの片隅で食べる。コンビニエ

ンスストアをはしごして暇をつぶし、最後はマクドナルドに入って休む。

「まさかこんな生活をするようになるとは」

パナソニックの工場では、自動販売機を組み立てる製造ラインで、四人チームのリーダーだった。ラインの調子が悪いと、深夜でも頻繁に電話で呼び出された。睡眠不足とストレスがたまり、体を壊した。残業代は払われず、給料は手取り二〇万円ほどで「とても続けられなかった」という。

この男性と同じようにマクドナルドで夜を過ごすオキタさん(40)も、二〇一二年三月までは三重県亀山市にあるシャープの液晶関連の工場で派遣社員として働いていた。シャープが韓国企業にシェアを奪われ、工場生産が落ち込んだために仕事を切られたという。

電機関係の工場で働きたいと大阪に来たが、希望の職はなかった。ときどき土木の現金(日雇い)仕事で稼いで食いつないでいる。だが、土木の経験が少ないため、仕事にあぶれることも多い。稼ぎがあれば簡易宿泊所(ドヤ)に泊まれるが、金がなくなれば、居続けることはできない。将来への不安から、気持ちも落ち込みがちになり、最近、精神科の治療を受けた。マクドナルドで一〇〇円のハンバーガーを食べて夜明けを待つ日が増えた。

就職氷河期で正社員につけず、非正規社員になった若者たちが次々と職を失っている。中でも、パナソニックやシャープなど大手電機メーカーは、国内工場の稼働が長期にわたって低迷し、巨額の赤字を垂れ流し続けた。真っ先に切られたのが、「雇用の調整弁」として雇用されていた非正規社員だ。それでも経営は回復せず、正社員の削減にまで踏み込んだ。

超円高により、国内生産の採算が悪化したこともあり、国内の工場を閉めて、海外に生産を移す動

きも加速した。非正規社員の雇用は減りこそすれ、増える見通しはまったくない。

明日のみえない不安の中で、つかの間の休息をとる。深夜のマクドナルドはそんな場所になっている。

だがその静寂を切り裂くように、午前二時前、大音量の音楽が突然、鳴った。

飲食スペースの「閉店」を知らせるアナウンスに、男性たちは重い足取りで店を出る。そろそろと向かった先は五〇メートルほど離れた新古書店ブックオフだ。

また夜が来るまで、街に埋もれて過ごす。そうすれば、マクドナルドの席が空く。

一杯一〇〇円、朝までいられる

仕事がなく、深夜営業の店で夜を過ごす人たちが増えているのは、大手メーカーなどの人減らしのせいだけではない。景気が表向き上向いても、格差拡大ではい上がれない人が増えているからだ。

商売繁盛を願う今宮戎神社の祭り「十日戎」が始まった一月九日。縁起物の熊手を手にした若者にまじって、カバンを三つ抱えた男性がマクドナルドに入ってきた。所持金は約三〇〇円。年末から仕事を探してきたが、見つからない。一杯一〇〇円のコーヒーを飲みながら、途方にくれる。

「日雇いの仕事やらへんか」。午前四時ごろ、店に入ってきた手配師風の男に声をかけられた。いつもは路上で誘われるのに、店にまで来るのは珍しい。いくら探しても希望の仕事がないのに、どんな日雇いがあるというのか。「どこへ連れて行かれるか、怖くて」。この日は断った。

今まで工場で働いていた人には、工事現場などで働く日雇いの仕事はきつい。良い条件の仕事は限